

死と向き合う医療と介護を

御坊保健所が講演会

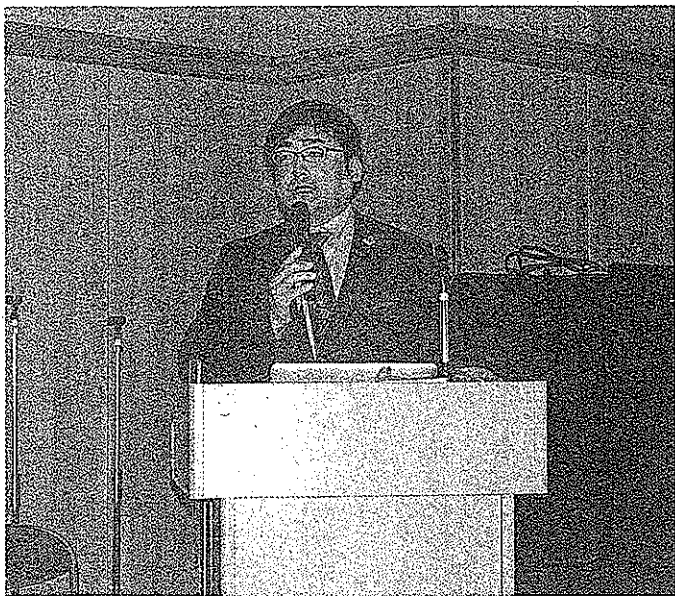
御坊保健所（木村圭吾所長）は、12日午後、日高総合病院で、医療と介護の連携事業講演会を開いた。講師は「医療法人ゆうの森」（愛媛県松山市）の永井康徳理事長で「自分らしい生き方―逝き方」と題して話した。永井理事長はこの中で「多死社会を迎え、最期まで本人が自分らしく生きることが出来るよう適切な医療と介護を提供し、本人や家族と共に歩んでいく」と話した。

講演会にはヘルパーや保健師など医療関係者約80人が参加して熱心に聞いた。永井理事長は、「退院から在宅、看取りへの療養支援を考える」をサブテーマに、終末期を迎える患者にどのように接するのが大切なことを中心に話した。永井理事長は、明治から昭和にかけては、自宅で最期を迎える人が8割以上だったが、最近では病院で最期を迎えるケースが8割を超えている。高齢化が

さらにアップしていく社会にあつて、亡くなつていく方々の最期をどのようにしていくかは、周りのみんなで考えることが大切。そのためには、患者と家族、医療と介護者の相互が常に連携して、情報を共有することが大事。

向き合う医療と介護を提供する必要性を強調した。その中で永井理事長は「住み慣れた自宅や施設で最期を自然に迎える選択肢があることの提案▽治すことができない病や死にゆく病に、本人や家族が向き合える医療と介護の提供▽本人や家族が生き抜く道筋を自由に選び、自分らしく生きるために、苦しさを緩和し、心地よさを維持できるように、多面的な医療と介護の提供▽最期まで、本人が自分らしく生きることが出来るよう適切な医療と介護を提供し、本人や家族と共に歩んでいくこと▽周囲の意見だけで選択肢を決定せ

ず、本人の生き方や希望にしっかりと向き合つて今後の方針を選択することが大切では―」などと呼びかけた。永井理事長は、2000年に愛媛県内で初めての在宅医療専門クリニックを開業。開業時はわずか4人のスタッフだったが、現在は医師、看護師、ケアマネージャーら総勢約100人のスタッフが揃っている。大勢のスタッフとともに終末期や認知症の在宅患者約600人の診察に励んでいる。永井理事長は、日本在宅医学会幹事、全国在宅療養支援診療所連絡会世話人も務めている。



日高総合病院で行われた永井理事長の講演会

「患者本位」貫く組織必要

在宅医療
講演会 多職種の連携をアドバイス

御坊保健所の在宅医る医療法人ゆづの森理療講演会が12日、日高 専長の永井康徳医師が総合病院で開かれ、愛媛県で在宅医療専門クリニックを開業している在宅、看取りへの療養



「無力さの自覚からチーム医療が始まる」と永井医師

支援を考える」でアドバイスした。

看護師や介護関係者ら約100人を前に、永井理事長はクリニックでの経験や自身の闘病生活をもとに、「在宅医療は情報の共有と方針の統一が重要」と説明。医療と介護など多職種がリアルタイムで情報を共有するためにITは必要不可欠だが、どのような看護や看取りをするかの方針を統一するためには患者や家族との話し合いが大切だと強調した。医療と介護の連携については、「自分たちだけでは何もできない気持ちを持つは自然と連携が必要になる。自分たちの無力さを自覚することからチーム医療が始まる」と持論を展開し、「目の前の病気を治すことだけではなく、患者や家族が満足できる医療を提供できるかが最も大切。患者本位を貫ける組織づくりが必要だ」と訴えた。